

信州発長期滞在施設の現状と課題に関する一考察

黒田 明雄

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2017年10月1日 受理)

1 はじめに

これまで国内の長期滞在をテーマにした研究は進んでこなかった。2016年3月、ロングステイ財団を母体に長期滞在型・ロングステイ観光学会が発足した。本学会は、国内及び国外における長期滞在型観光に関する学術研究の向上と社会に対して広くロングステイの普及促進を図るための活動や分析・把握を目的としている。2017年1月に「地域ごとのロングステイ」「国内ロングステイと地方創生」等の分科会テーマを公募により定め、会員間の研究交流を推進する方向性が示された。¹⁾

国内においては湯治目的の長期滞在は知られていたが、近年、インターネットを通して滞在型の宿泊情報をよく目にするようになった。また、福井県の鯖江市や越前町などでは、長期滞在者の受入強化を目的にロングステイアドバイザーのモニター滞在を実施している。

筆者は、マレーシアを中心に東南アジア諸国でのロングステイ調査をする一方で、国内ロングステイの動向にも注目してきた。海外ロングステイ経験者の多くが、国内各地でロングステイをしている状況が調査の過程で分かってきた。避寒を目的とする沖縄のマンズリーマンションや避暑目的に利用される北海道「ちょっと暮らし」施設、長野県山ノ内町の長期滞在旅館等はロングステイの宿泊施設となっている。日本人の余暇利用の多様化やインバウンドに対応した泊食分離化により自炊可能な長期滞在料金を提示した宿泊施設の情報は増えている。

本稿の目的は、国内ロングステイの普及を念頭において、長野県山之内町を中心に展開する長期滞在施設の開設の経緯、事業形態、現状と課題を把握することである。そのために、2017年3月2日(木)から1週間、山ノ内町の長期滞在施設の丁子屋旅館に滞在し、長期滞在事業の発案者や長期滞在施設の経営者、長期滞在者にインタビューを実施した。

2 長野県山ノ内町の立地

ロングステイの視点から立地メリットについて述べてみたい。長野県志賀高原の麓に位置する山ノ内町は、避暑地としてシニア層に人気のある釧路や積雪期に外国人にも人気の倶知安やニセコと共通する気候的な要素がみられる。

国内ロングステイ上位5県は、沖縄県、北海道、京都府、東京都、長野県である。²⁾ 長

野県は関東や関西からアクセスが良く、風光明媚な避暑地、温泉目的の保養地として支持されている。

山ノ内町の湯田中温泉郷へは、長野電鉄の終点湯田中駅が玄関となる。駅周辺に安価なレンタカーを取り扱う給油所がある。マイカー利用者は、高速の長野 IC を過ぎ信州中野 IC を降りて山ノ内町に向かう。山ノ内町の近隣にはスーパーや飲食店、医療機関等の生活インフラが整っている。

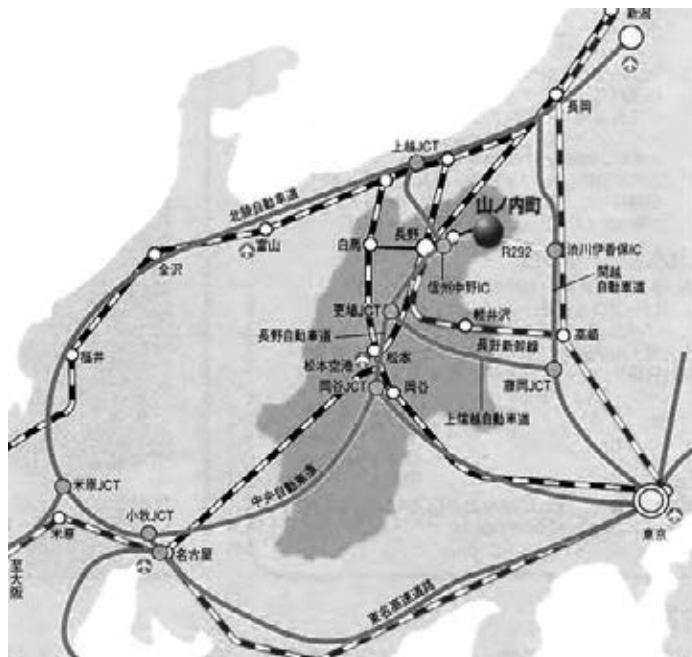


図 山ノ内町へのアクセス
出所) 山ノ内町公式ウェブサイトより

当地は7世紀に温泉が発見され、草津街道の宿場となり湯治場であった。九つの温泉街の散策や湯めぐりができる。町内には野猿が温泉に入ることによって知られている地獄谷野猿公苑が、スノーモンキーの愛称で外国人に人気である。

当地には、夏の避暑、秋の紅葉、冬のスキー、温泉保養等々と長期滞在の拠点としての魅力がある。車で1時間の範囲に豊富な観光資源があり、四季折々の信州を楽しめる環境にある。

3 長期滞在ビジネス開設の経緯

インターネットサイト「長期滞在 .com - 宿泊施設」³⁾の運営者は、山ノ内町のマルチ不動産の土屋富夫氏である。サイトの管理人は、大阪から十数年前に移住した村上徳二郎氏である。両氏とも団塊世代でまち作りに関心が高い。釧路市をはじめ北海道各地の7会場で「長期滞在型観光地づくり普及セミナー」(2013)において、長期滞在に関する事業形態や諸問題について講演している。

本項は、両氏へのインタビューに加えて、マスコミの取材記事⁴⁾、北海道セミナーの資料⁵⁾、長期滞在 .com の事業案内⁶⁾、「長期滞在 .com - 宿泊施設」に掲載された以前の内容⁷⁾をもとに、長期滞在ビジネスの開設に至る経緯を把握したい。

長期滞在施設情報を「長期滞在 .com - 宿泊施設」から発信するきっかけは、経営の安

定を願う翠泉荘（旅館）の高齢の経営者から不動産業を営む土屋氏への依頼に始まる。地域の旅館の衰退化が進んでいく中、団塊世代の大量退職者の田舎暮らしに目をつけた。そこには旅館の空き部屋減らし、空き部屋の有効利用、持続可能な経営が根底にあった。

ホテルや旅館などの宿泊施設は旅館業法（昭和23年法律第138号）のもとに宿泊ビジネスがおこなわれてきた。全国的傾向として温泉地にあるホテルや旅館は、高度経済成長期を経て時代の変化の中で減少している。経営者の高齢化と後継者の問題、施設の老朽化と設備投資の問題を抱えている。山ノ内町においても同様な状況がみられる。

上述の両氏は、週単位月単位の自炊型長期滞在客の受入情報を発信したところ、積雪期にはスキー目的の需要があることが分かった。本格的な「長期滞在 .com - 宿泊施設」の運用は、2007年4月から開始している。利用者が「長期滞在 .com - 宿泊施設」に掲載された宿泊施設に予約するシステムである。その後、グリーンシーズンに受け入れを拡大することになった。

旅館の一部屋で1週間1ヶ月間生活する貸別荘的なスタイルである。コンパクトな自炊設備さえ用意しておけば、食事や布団関連など経営者側の人的な負担は激減する。重要な点は、ホテルや旅館の空き部屋対策になることである。一定のニーズを感じた土屋氏は、庶民感覚の国内長期滞在（国内ロングステイ）の普及の必要性を確信するに至る。

利用者にとっては、敷金、礼金、保証金、清掃費、設備使用料や水光熱費も不要で、手頃感のある長期滞在料金設定である。生活に必要な白物家電や什器備品が備わっているウィークリーマンションの旅館版とも言える。

長期滞在の事業コンセプトに賛同し、「長期滞在 .com - 宿泊施設」に情報が掲載された施設は、翠泉荘、丁子屋旅館、湯田中湯本、島屋、角間荘、アスペン志賀、奥信濃山荘の7施設になった。

長期滞在客の受入情報を発信し、開始から約10年が経過した。翠泉荘は、積雪期はスキー目的のシニアの男性常連客に人気の宿であったが、2017年4月、老朽化により営業停止、角間荘は事情でグループを離れた。丁子屋旅館、湯田中湯本、島屋、アスペン志賀、奥信濃山荘の5施設が事業を継続している。

これらの5施設の中で素泊長期滞在専門を掲げ営業しているのは丁子屋旅館で、他の4施設は一般宿泊客を受け入れながら長期滞在のニーズにも応える併業タイプである。

当地における長期滞在用の部屋数は多くない。リピーターの中には、自分の宿の確保のために情報を他人に話すことをためらう声も聞かれた。長期滞在施設の拡大を予想していたが、広がりをみせていない。

4 「長期滞在 .com - 宿泊施設」の事業形態

筆者は、2017年3月上旬に素泊長期滞在専門の丁子屋旅館に1週間滞在し、ここを拠点にインタビュー調査をおこなった。同旅館では、12月1月2月のピーク時を過ぎ常連

客の半数以上は帰っていたが、月滞在の夫婦3組と週滞在の家族1組が滞在していた。

翠泉荘の依頼に端を発し長期滞在事業モデルを考えたのは土屋氏である。この事業のコンセプトは、宿泊業を不動産賃貸業に近づけた形態であり、宿泊業と不動産賃貸業の中間に位置するビジネスモデルである。従来の食事付の宿泊ビジネスモデルでなく、泊食分離の庶民価格の長期滞在ビジネスモデルである。いわゆる長期滞業者用のマンスリーマンションの旅館版である。

筆者は、海外ロングステイの調査経験から国内ロングステイの普及の条件は、手頃な長期滞在料金、泊食分離、自炊設備完備、部屋単位料金、室内の清潔感と考えている。土屋氏が「長期滞在 .com - 宿泊施設」から発信する長期滞在施設は、筆者の考える国内ロングステイ普及の条件を満たしていた。

「長期滞在 .com - 宿泊施設」の利用者は滞在先で宿泊費を支払い、宿泊事業者は手数料をマルチ不動産に収めるシステムである。月単位の利用者は、マルチ不動産が定期賃貸契約の形で宿泊施設の部屋を貸し、本契約では借地借家法に基づき簡易契約書を交わす形態をとっている。事務局をマルチ不動産に置き、土屋氏と村上氏が問い合わせや相談に対応するコンシェルジュの働きをしている。

この長期滞在事業へ旅館やホテル等が加入するには、事業コンセプトへの賛同と自炊設備・洗濯機の設置が義務付けられている。サービス水準の維持のため、清潔さと接客態度を求めている。施設によっては館内の天然温泉や外湯を利用することもできる。すべてが完備されたマンスリーマンションではないが、旅館内や室内に生活に必要な電気製品や備品が備わった長期滞在施設である。

土屋氏と村上氏は、長期滞在施設の情報提供に留まらず、観光商工会館の隣の空き家を借りて「おやすみ処 楓」をオープンし、地元の人々と長期滞業者の出会いや交流の場を設けた。地元女性によるボランティアグループができて、イベントや農業体験など地元にかかわる活動がおこなわれていた。しかし、その空き家が売却されることになり、やむなく2016年に閉じることになった。両氏の意図したことは、志半ばでストップしたが、滞在型の交流人口や長期滞在のリピーターにつながる有効な取り組みであったと考える。

初めての長期滞在では、周辺観光に時間をかける傾向があるが、リピーターになると地元の人々との交流の機会も持っている人が多い。筆者が釧路でインタビューしたシニア夫婦は、山之内町で何度も長期滞在経験があり、「おやすみ処 楓」(2016閉設)を滞在中の居場所にしていた。長期滞業者にとって、滞在中の交流拠点は重要である。

自治体の状況は異なり、単純に比較することはできないが、長期滞業者の受入体制や情報発信の工夫次第で、国内ロングステイ地として山ノ内町の認知度はさらに高まると考える。沖縄や北海道にならぶ国内のロングステイの地として、さらなる長期滞在のニーズを期待できると考える。

5 事業メリット

事業形態が、貸別荘の長期貸し旅館版、ウィークリー・マンスリーマンションの旅館版に近い、この事業のメリットについて、事業者、利用者、地域の視点から以下のように整理できる。⁸⁾

1) 事業者

- ・宿泊施設の空き部屋の有効活用により一定の収入につながる。
- ・経営者の高齢化と後継者不足などから食事付サービスを維持していくことが負担になっている事業者の業態変換が比較的容易で一定の収入が得られる。
- ・後継者がいない場合、第三者へ運営を委託しやすい。
- ・稼働率の高い本館以外の旧館や別館など、稼働率の低い休眠状態の施設の活用が可能である。

2) 利用者

- ・利用料金が手頃であれば、長期期間の滞在でも大きな負担がかかりにくい。
- ・礼金、敷金、保証金、水光熱費、清掃費等が不要で利用しやすい。
- ・別荘を所有するより自由度が高く、維持管理や草取り等の負担なく利用できる。
- ・観光旅行でもなく、移住でもなく、知らない土地で一定期間暮らすような旅ができる。
- ・夏は高原散策、秋は紅葉、冬はスキーなど目的に応じ貸別荘感覚で利用できる。
- ・家庭と同じように自炊を基本としながら、出先でその土地の食を味わうことができる。
- ・山ノ内町の場合、滞在施設で温泉三昧が可能である。
- ・共有スペースや風呂場などが交流の場となり長期滞在者ならではの情報交換ができる。
- ・リピーターになると人とのつながりが増え、第二の故郷のような居心地の良さを味わえる。
- ・田舎暮らしを考える場合、お試し利用で季節感や生活感等を知ることができる。

3) 地域

- ・地元で買い物や飲食など消費することで経済効果につながる。
- ・異なる土地から交流人口が増加することで活気につながる。
- ・毎年単位の利用するリピーターは二地域居住者となる。
- ・使われていない宿泊施設が減ることで町が整う。

事業発案者の土屋氏も「長期滞在者が増えれば買い物でお金を使う。町の人口が増えたのと同じで地域活性化につながる」と述べている。⁹⁾

事業者にとってメリットがあると考えられるものの、10年を経てもこの事業が拡大していない。その理由は、前述したように長期滞在者に対する受入体制の違い¹⁰⁾が考えら

れる。温泉街にあるホテルや旅館の場合、従業員を雇用する必然から、年間を通した稼働率や利益が求められる。そこに長期滞在の事業形態を取り入れにくい状況がある。アパートの空き部屋と同様にホテルや旅館においても空き部屋を避けることはできない。家族経営の小規模な旅館は、大きな投資をすることなく空き部屋を長期滞在用に変換し、一定の収入を得やすい。

山ノ内町では宿泊施設が減少したとはいえ、新たな事業形態であるゲストハウス「禅」や「AIBIYA」(2016)がオープンした。両ゲストハウスとも日本人よりも外国人宿泊客が多い。前述のスノーモンキー観光やスキー場に出かける外国人の若者がいた。

「長期滞在 .com - 宿泊施設」から発信されている長期滞在情報は、年金暮らしのシニアや子育て就労世代には、メリット感がある。室内の生活空間は日常、一步外に出ると非日常であり、「暮らすように旅する」国内ロングステイの醍醐味を体験できる。

6 各長期滞在施設の状況

「長期滞在 .com - 宿泊施設」から丁子屋旅館、湯田中湯本、島屋、アスペン志賀、奥信濃山荘の5件の施設の基本情報を得ることができる。それぞれの長期滞在施設の画像や説明は参考になるが、周辺環境や居心地は伝わりにくい。

各施設を視察してみて、立地環境、提供可能な部屋数、室内環境、受入状況などに特色があった。

丁子屋旅館、湯田中湯本、島屋の3件は山ノ内町にあり、それぞれが徒歩圏内の近い位置にある。アスペン志賀は、志賀高原ジャイアントスキー場にある。奥信濃山荘は、野尻湖畔にある。

利用者にとって最も気になる宿泊料金体系を表に整理した。

表 5 施設の料金体系

	1週間	2週間	3週間	4週間 (1ヶ月)	備考
丁子屋旅館 8畳和室 3名まで 10畳和室 4名まで	30,000円(税込) 33,000円	51,000円 55,000円	72,000円 77,000円	92,000円 99,000円	冬季暖房ストーブ 灯油代実費
湯田中湯本 8畳和室・洋室ベッド 2名(4名可) 8畳和室+4畳和室 2名(4名可)	55,000円(税込) 58,000円	105,000円 110,000円			冬季暖房費実費 2名以上要問合せ
島屋 10畳和室 4名まで 12.5畳 5名まで	34,000円(税込) 36,000円	57,000円 61,000円		102,000円 109,000円	冬季暖房費実費
奥信濃山荘 洋室10畳 2名(3名可) 和室8畳 2名(4名可)	30,000円(税抜)	55,000円	75,000円		冬季暖房費 1,000円/日 1,000円/日1名追加
アスペン志賀 8畳和室 3名まで 10畳和室 4名まで	36,000円(税込) 39,000円	60,000円 64,000円		109,000円 116,000円	冬季暖房費別途 トイレ付は滞在期間 により別途必要

出所) 長期滞在 .com - 宿泊施設のサイト情報をもとに筆者作成

部屋単位の素泊料金であるが、夫婦や家族滞在にとって手頃な値段である。「長期滞在 .com - 宿泊施設」には、「あなたの別荘がここにあります」「ウィークリーマンションの旅館版」「礼金・敷金・後費用など一切不要」という文言がみられ、不動産業を生業とし、豊富な旅行経験を有する土屋氏の発想が形になっている。

これらの5施設の中で素泊長期滞在専門を掲げているのは丁子屋旅館で、他の4施設は一般宿泊客を対象にしながら長期滞在のニーズにも応える旅館併業タイプである。丁子屋旅館の場合は7部屋、湯田中湯本は一般宿泊客と異なる棟に十分な広さの2部屋が用意されている。島屋は外国人宿泊客が多く、客室12部屋の旅館である。奥信濃山荘は7部屋の内2部屋を提供している。アスペン志賀はスキー客の多い積雪期、合宿で埋まる夏休み、ゴールデンウィークの3つの期間を除く時期に長期滞在客を受け入れている。それぞれの施設により長期滞在用に提供している部屋数は異なる。

次に長期滞在のポイントである生活に欠かせない設備・備品である。寝具は人数分用意されている。部屋の清掃や布団の上げ下げはセルフである。滞在期間は自宅の部屋同様に使用できる。

いずれの施設も自炊ができるだけの設備や什器備品が備わっている。自炊室は共同利用である。希望により食事の提供ができるのは、湯田中湯本、島屋、奥信濃山荘である。

インターネットに関しては、5施設ともネットコーナーを設けている。室内で無料WiFi対応しているのは丁子屋旅館とアスペン志賀である。長期滞在者は、スマホやタブレット、ノートパソコンを持参しているケースがほとんどである。

温泉は4施設にあり24時間利用可能である。丁子屋旅館、湯田中湯本、島屋は温泉地に位置し、宿泊客には外湯が自由に利用できる。アスペン志賀も温泉がある。

7 素泊長期滞在専門の丁子屋旅館

丁子屋旅館は一般宿泊客を対象にした130年続く歴史のある旅館であった。女将の大病をきっかけに従業員を解雇し、2007年に負担の少ない自炊型の長期滞在部屋の経営に切り替えた。女将と主人にとって、はじめ自炊施設にすることには抵抗があり、一時は廃業も考えたそうである。

食事の準備・片付けや布団の上げ下げなど、旅館の経営には、人件費とともに経営者に大きな負担がかかる。一般宿泊客を受け入れていた当時の14部屋すべての部屋を使うのではなく、手が届く範囲の3階の7部屋に限定した。施錠のできる部屋が廊下を挟んで向かい合ってならんでいる。これにより労働力は10

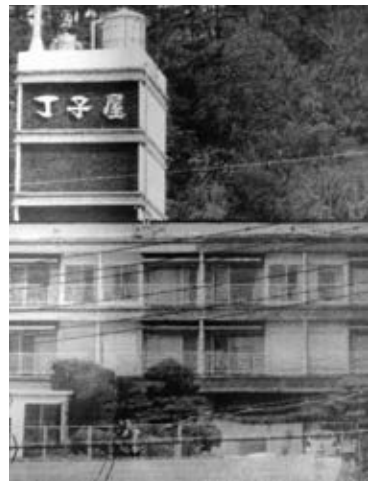


写真 丁子屋旅館

分の1に軽減されたその
うである。

各部屋への温水・冷
暖房を中止し、ボイラー
を小型化した。その代
わりに各部屋に扇風機
と石油ファンヒーター
を設置した。旅館の設
備・備品の再利用をし
ながら、コストを考慮
し長期滞在客に必要な
物品を整えた。源泉か

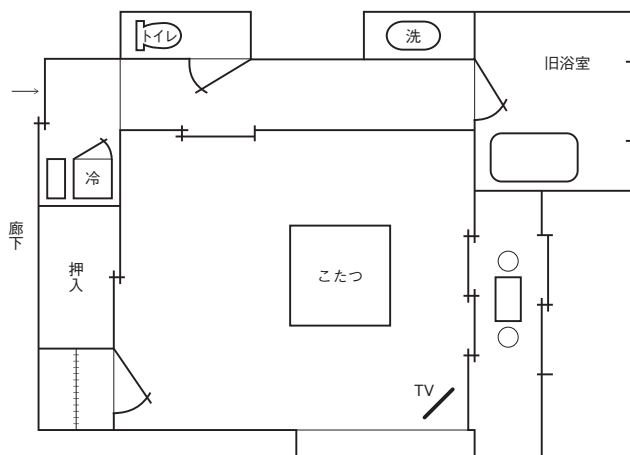


図 部屋の間取図

け流し露天風呂付の浴場温泉は1階にある。男女交代であるが、24時間利用可能である。風呂は長期滞在客の交流の場となっている。

共同自炊室は3畳程度の大きさで3階と2階にあり、長期滞在者同士譲り合って使用している。筆者も自炊生活を体験した。各室内の入口に冷蔵庫が備えられている。2階の自炊室横に共同利用の大型冷凍庫がある。自宅と使い勝手は異なるが、料理器具や皿は揃っていて、調味料を持参すれば普段の食事ができる。炊飯器は部屋数分あった。ただ、自炊室と部屋との往復が必要である。同旅館には長期滞在者が集える食堂はないので、それぞれが部屋で食事をとる。食材は近くのスーパーやコンビニ、車で10分程度の大型スーパーで購入できる。普段と同様、健康に留意した食生活ができる。

筆者が滞在した3月上旬は、冬期の最盛期を過ぎ空き部屋が出始める時期ではあるが、スキー目的の数組のシニア夫婦が月単位で滞在していた。また、子供連れの夫婦が1週間滞在して雪遊びを楽しんでいた。12月1月2月の積雪期は、四国や関西、東海のアクティブなシニア夫婦のリピーター客で埋まるそうである。週・月単位の部屋料金のみで、礼金・敷金・水光熱費・清掃費・管理費など一切不要で、負担の少ない手頃な価格が年金生活者や家族利用者の人気を得ている。

夏の避暑、紅葉の秋、スキーの時期を除いて、稼働率の悪い3月中旬から7月中旬と11月、この期間の稼働率を上げることが課題であった。仕事での長期滞在客、バイクツーリングの1泊2日の素泊り客なども受け入れて稼働率を上げる経営努力をしている。

建物や室内、設備が新しいわけではないが、共有スペースの清潔感は保たれていた。長期滞在者が出かけた日中、廊下や自炊室、温泉浴場の清掃を女将の主人が担当していた。

旅館という構造上、玄関そばの受付を通り出入りする。同じ建物の中で生活しているので、長期滞在者同士また女将と顔を合わせることがある。自炊室や温泉浴場は交流や情報交換の重要な場となる。

1 週間滞在して、さりげない気配りのできる女将の人柄が印象的であった。状況をみて必要な情報を提供したり、手作り総菜の差し入れがあったりする。長期滞在者へのもてなし方については、事業を立ち上げた土屋氏も評価していた。長期滞在者が共通に発した言葉は居心地の良さであった。リピーターにつながる大きな要因は「人」にあることを実感した。

女将へのインタビューの最後に、従来型のホテルや旅館を素泊長期滞在型に移行する条件をたずねた。温泉旅館の経営から泊食分離の長期滞在施設に転換するには葛藤があったそうだ。家族経営、小規模、経営者の高齢化、借金がないこと、少ない投資、さらに、税金の観点から鉄筋よりも木造構造という回答が返ってきた。

素泊長期滞在専門の丁子屋旅館が、リピーターに支持される理由を体感的に理解できた。マンスリーマンションや貸別荘にはない温もりがあった。

8 長期滞在者へのインタビュー

筆者が滞在した時期は積雪期で、スキー目的のシニア夫妻の長期滞在者がいた。丁子屋旅館の利用者は香川、兵庫、大阪、和歌山、愛知、静岡、神奈川等々、多方面にわたる。長期滞在者の大半は、60代から70代のシニア夫婦である。インタビューに協力してくれた3組のシニア夫婦ともリピーターであり、二地域居住者になっている。海外ロングステイや海外駐在経験を有する人もいる。リピーターの多くは、次年度の予約をして帰るそうで、新規の予約は空き部屋の状況次第である。

1) T 夫妻 (愛知県)¹¹⁾

*電話インタビュー：2017年2月6日 夫70代・妻70代

*滞在期間：1月～2月 1.5ヶ月間

受け入れが始まった時からの常連客で、10年目を迎える。女将さんの人柄と居心地の良さから毎年来ているリピーターである。天候の悪い時以外はスキーに出かけている。滞在1ヶ月目は、交通費、宿泊料金(約10万円)、2人分のシーズン券(約13万円)に加えて食費で約35万円、2ヶ月目は宿泊料金と食費で約25万円が滞在にかかる。通信機器にアイパッドを持参、ラインを利用。丁子屋旅館では、程度な距離感での長期滞在者同士の付き合いがみられる。国内はほとんど回った経験を持ち、一度の滞在に最低2週間以上費やす。海外はアメリカの世界遺産を月単位で滞在し、3年かけて回ったそうだ。イギリスやベルギーにもロングステイ経験がある。

2) M 夫妻 (兵庫県)

*インタビュー：2017年3月2日 夫70代・妻70代

*滞在期間：1月7日～3月中旬 2ヶ月と1週間

夫は元公務員で退職後70歳まで福祉施設で働く。妻は60歳まで看護師として勤務。閉館した翠泉荘に2年続けて2ヶ月滞在した。3年目は、12月中旬から3月末まで志賀高原

のホテルでお手伝いの住み込み滞在、自由時間にスキーを楽しんだ。現在、長期滞在は4年目で丁子屋旅館を利用している。どこに何があるか熟知していて、貴重な情報の持ち主である。

滞在1ヶ月目は、交通費、宿泊料金、2人分のシーズン券に加えて食費で約30万円、2ヶ月目は宿泊料金と主に食費で約20万円が滞在中にかかる。好みの調味料を持参、朝夕自炊。昼食は手作り弁当持参で四輪駆動の軽四ジープで志賀高原に出かけ、適度にスキーを楽しんでいる。毎日ご馳走は不要、普段通りの健康生活を送る。妻が携帯電話とノートパソコンを使っている。妻は海外旅行の経験がある。

3) Y夫妻（静岡県）

*インタビュー：2017年3月3日 夫60代・妻50代

*滞在期間：1月12日～3月11日 2ヶ月間

夫は元会社員、妻は専業主婦。キーワードを打ち込み、「長期滞在.com - 宿泊施設」を知ったことが利用のきっかけである。毎年、積雪期に2ヶ月滞在、3年目のリピーターである。来年は町内会の世話役なので、連続の長期滞在はできないとのこと。スキー目的の滞在中、天候が悪い時以外は志賀高原に四輪駆動の普通車で出かけている。ミキサーや使い勝手の良いマイフライパンを持参、日頃の生活の延長と考え、健康に留意した食生活をしている。1年目の昼食は弁当を作り持参したが、2年目からは健康を考えて簡単な軽食と飲み物で済ませている。普段はスマホを使い、室内ではノートパソコンとタブレットを活用している。現役時代は転勤族で国内外の長期滞在中生活経験がある。定年退職後に北海道の長期滞在経験がある。いろいろな土地に暮らすことに慣れた夫妻である。

9 おわりに

長期滞在中は、人間にとって心豊かな人生を送る余暇の過ごし方である。また、国内に長期滞在中者が増加することにより、地方の経済効果の一助となる。

本稿では、国内ロングステイの普及を念頭において、長野県山ノ内町を中心に展開する長期滞在中施設を調査した。その開設の経緯、事業形態、現状と課題を把握した。視察やインタビューから、長期滞在中者を増やす上で重要な点を述べる。

- ・観光協会と旅館組合、行政等が連携する受入体制が整えば、ロングステイ需要も見込まれる。
- ・行政の公式ウェブサイトやリンク先に長期滞在中情報があれば、認知度が高まると考える。
- ・地元の人や長期滞在中者同士の交流の場を設けることで、リピーターにつながりやすい。
- ・素泊長期滞在中専門施設への変換を考える場合、丁子屋旅館の取り組みが参考になる。

当地は、夏の避暑、秋の紅葉、冬のスキー、温泉保養等々と長期滞在中の拠点としての魅力があるところである。

注及び引用文献

- 1) <https://www.asjlt.jp/> 2016年3月、ロングステイ財団を母体に設立された長期滞在型・ロングステイ観光学会（事務局／帝京大学内）のホームページ参照。
- 2) 常岡武他2名編「ロングステイ調査統計2016」一般財団法人ロングステイ財団，20頁，2016。国内ロングステイのアンケート調査結果を記載し，動向と分析を18-34頁にかけて公表している。
- 3) <http://www.choukitaizai.com/>「長期滞在 .com - 宿泊施設」のサイト（2017.9.25）「地図から宿を選ぶ」をクリックすると，5件の長期滞在施設の情報につながる。以前の掲載内容が整理され，国内長期滞在旅行に関する諸々の記述はカットされている。
- 4) 大分合同新聞2010.11.27「日本の実力 観光上 ゆったり長期滞在」，京都新聞2010.12.1「日本の実力 観光上 長期滞在」，信濃毎日新聞2013.2.24「山ノ内町・湯田中温泉老舗旅館の再出発」，北信ローカル2014.1.10「山ノ内町の土屋，村上さん 先駆け 成功の秘訣…」，日本経済新聞2015.2.14「海外客 素泊りでつかむ」
- 5) 2017.3.3 丁子屋旅館にてマルトミ不動産の土屋富夫氏とサイト管理人の村上徳二郎氏にインタビュー。「長期滞在型観光地づくり普及セミナー」A4 4枚の資料に基づいて説明を受ける。
- 6) マルトミ不動産の土屋富夫氏から提供を受けた「長期滞在.comの事業案内」A4 2枚の資料
- 7) 「長期滞在 .com - 宿泊施設」（2017.1.26）この時点のサイトの掲載内容から，利用ガイドや国内長期滞在旅行の普及の提案，事業メリットについて詳細を知ることができる。
- 8) 前掲5) 前掲6) 前掲7) の資料に記載された内容とインタビューをもとに筆者がメリットを整理した。
- 9) 前掲4) 信濃毎日新聞2013.2.24「山ノ内町・湯田中温泉老舗旅館の再出発」を参照。
- 10) 山ノ内町の公式ウェブサイトに移住・定住情報はあるが，子育て世代には仕事の問題，シニア世代には終活や医療の問題があり容易なことではない。長期滞在であればハードルは高くない。リンク先に長期滞在の情報はない。第3次山ノ内町観光交流ビジョンの中で，9頁10頁に長期滞在型観光（ロングステイ）についての記述がみられる。毎年多くの長期滞在者が集う釧路市の場合，公式ウェブサイトに移住と長期滞在の情報を併記し，民間の長期滞在サイトにリンクをはり，詳細な生活情報が得られる。
- 11) T 夫妻は開業当初からの常連客で，2月末までの滞在である。筆者の滞在と入れ替えになるので，女将の計らいにより，T 夫妻が丁子屋旅館滞在中に電話インタビューを実施。

A Study of Long Stay Facilities in Shinsyu — Situation and Problems —

Akio KURODA

*College of Science and Industrial Technology
Kurashiki University of Science and the Arts,*

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2017)

Yamanouchi-cho in Nagano Prefecture is very attractive place as long stay base because of avoiding heat in summer, colored leaves in autumn, ski in winter, hot spring, etc.

Long stay is a kind of spare time to enjoy life. Increasing in the number of long stayers in Japan leads to activation of regional economies.

I researched long stay facilities in Yamaguchi-cho in Nagano Prefecture in order to spread of long stay.

I grasped details of setting up, business style, present situation, and problems of the facilities through visiting the facilities and interviewing long stayers and persons who concerned facilities.

The follows are important to increase in the number of long stayers.

The more Tourists bureau, Ryokan association, and Yamanouchi municipalities work in close cooperation to accept long stayers, the more long stayers are expected.

If information of long stay is included in official website and liked list in the Yamanouchi municipalities, long stay will become increasingly familiar.

If there are places to communicate and interact with local people and between long stayers, many long stayers will become regular ones as repeaters.

If changing into facilities only for long stay without meals is required, measures of “Chojiya Ryokan” serve as a reference.